

商標権の取得で関係機関との
結束を強め、良質な地酒を
広く県外へアピール

越前・若狭の地酒

福井の自然がもたらす清い水と、五百万石や山田錦などの良質な酒米。これらを使い、杜氏や蔵人が長年の経験に裏付けられた高い技術で作る「越前・若狭の地酒」。しかし、こだわりの地酒を作っても、人口減少や日本酒離れによって需要は低下。地域団体商標を取得することで福井県産の地酒の魅力为全国へ発信する力を底上げし、蔵元それぞれの取り組みをサポートする組合の組織力を高めています。



福井県 福井市

越前・若狭の地酒

福井県酒造組合



地域団体商標
組織強化事例

06

減少し続ける酒類の消費、
関係各所との連携強化を
目指し商標を取得

「銘酒、水の如し」と言われるように、「水」は酒造りにおいて重要な材料。さまざまなミネラルを含み、麴の発育、酵母の増殖を促進します。その成分は水の採れる土地によって異なり、その違いが酒の特徴として現れます。福井県はミネラル豊富な白山水系の水と酒専用

の酒米生産に適した気候を持つ、酒造りに恵まれた土地。今ほど酒の保存がきかなかった時代には京都や灘にまで売りに出していたほど酒造りが盛んでした。しかし、少子高齢化や人口減少時代の到来が酒の消費に与える影響は小さくありません。成人一人あたりの酒類消費数量は1989年度以降では1992年度の101.8Lをピークに減り続けており、2017年度においては80.5Lにまで減少。各酒類の消費

傾向を見ると、2003年あたりから発泡酒や新ジャンル飲料の消費が増えている一方で、ビールや清酒は減少。特に清酒の課税移出数量は1973年度の177万KLをピークに、2017年度には約1/3となる53KLにまで減っています。こうした状況の中、福井県酒造組合は2012年12月「越前・若狭の地酒」で地域団体商標を取得。組合の結束はもちろん、福井県や関係機関とのつながりも強め、福井の

地域ブランド 10の成功物語 | 組織強化事例



【権利者】福井県酒造組合
【住所】福井県福井市毛矢1丁目3番10号
【地域団体商標】越前・若狭の地酒
【商標登録】第5541486号

福井県酒造組合
ホームページへ



良質な酒を県内外にアピールするための組織力強化を図りました。



蔵人による
酒造りの様子

「ブランド推進連絡会」を
発足し、地域ブランドの
さらなる発展を図る

福井県酒造組合では、「越前・若狭の地酒」の商標登録を契機に、さらなる福井県産酒の認知度向上、地酒の需要振興、輸出促進を図るため、2013年5月、生販三層（蔵元、卸、小売）の組合、福井県、ジェトロ福井、金沢国税局などとともに「越前・若狭の地酒ブランド推進連絡会」を発足。以来、福井県酒造組合が母体となり、年に一度のペースで意見交換会を開催しています。2015年の第4回開催では、

報道機関を交えて商標である「越前・若狭の地酒」ロゴマークの報道発表を実施。のぼりや封筒、名刺やパンフレット、法被など様々なツールに使用され、認知度向上に役立てられています。2018年と2019年の直近2回の開催では、地酒のPRに効果的なSNS活用セミナーと、インバウンドへの対応や海外展開に向けた取り組みについて有識者を招いた講演会を実施。同連絡会の発足により、酒造業界と行政のつながりは一層深まり、海外展開やイベント開催時などの協力体制が強固なものとなりました。毎年3月には福井県内最大の地酒イベント「越前・若狭の地酒 春の新酒まつり」、9月には「秋の日本酒で乾杯 地酒フェスタ」を開催。県外からはもちろん、近年は訪日外国人観光客の姿も増えており、国内外の人々に「越前・若狭の地酒」をアピールしています。そして今もっとも注力しているのが、新しい酒米「さかほまれ」の開発。開発には10

年近くかかっており、2019年春に約30t作付けし、2020年4月に米、酵母、水、オール福井県産の最高級地酒として販売予定とのこと。商標登録を機に、より高まっていく福井県酒造組合の組織力。それこそが日本酒離れを憂うだけでなく、新しいことに挑戦し、未来を切り拓く原動力となっています。



イベントに訪れる外国人観光客も増加している

この方にお話を聞きました!
福井県酒造組合



常務理事
齋藤 政秀 氏

地域団体商標の取得は「越前・若狭の地酒ブランド推進連絡会」発足のきっかけとなりました。取得した商標をどのように活用していくべきかを本組合だけで考えるのではなく、関係機関や行政と話し合い、連携して取り組んでいく場所ができたことで、活動の幅が広がったと感じています。

